
見習い魔術師の100の呪文

ユキカゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見習い魔術師の100の呪文

【Nコード】

N2137W

【作者名】

ユキカゴ

【あらすじ】

神風特攻隊に任命され、死を覚悟した主人公…。

しかし、敵への衝突寸前に気を失って…。

現代武器と古代魔術といろんなものが混ざった世界に迷い込んだ！
？

第一章 プロローグ（前書き）

この物語は、フィクションです。
実際の人物等とは、一切関係ありません。
これ、鉄板だよね？

（登場人物）

主人公（名前なし）

ニホン国という国にいたが、戦死。
しかし、別世界に飛ばされる。

ノエルⅡフォート

説明なし

大陸

大国リーシップ

四つの島の総称。

ガレー島 ドルグレ島 フォーミル島 ミシエール島があり、フォ
ーミル、ドルグレ ミシエール ガレーの順で大きい。

ニホン国

神風と呼ばれる、突撃部隊で、敵軍を一掃するという馬鹿げた国。
勢力拡大中

第一話 魔術師

「…ここは…つく…」

俺は、どうしてこんな所に…。

って、俺…なんで…あれ？あれ？…。

わっわけわかんねえ！なんか、自分の記憶探っても、何も出てこねえ！

どういう事だよ…。

とりあえず…持ち物を確認…。

えと…携帯電話…？にしては、ごついもの…、穴が開いてるところから声を聴くのはわかる。

でも、このチャネルってなんだ…？

…まあいいや…ほかは…あ、ない…。

「持ち物は…これだ…ん？何か落ちたな」

一面草原で、草しか見えないところで、何か落ちて、草がガササって音がなった。

それを見ると、それが…銃器であった事がわかった。

「わっわわ！なんで俺、こんなもん持ってんだ！くそっ！」

それを、驚いて投げ飛ばす。

すると…思ったよりも鈍い音がする。

てか、さっきみたいな草の音じゃない。

何か…こう、コツコツしたものに…例えるなら、石…。

でも、そのあたった方向を見たら…自分よりも、メチャクチャ身長のでかい色がねずみ色した石の化け物だった。

「伏せて！」

俺は、それを聞いて、体をかがめた。

すると、その上を何かずっしりしたものが乗った。

この感触…靴…？

「イー ルグ、！」

「な、うがっ！ちよっ、おまつ！」

「うっ、動かないでよ！あっ！ああああバランスがあああああ！」

俺の上に乗った人が、何かを口にして、そして、倒れた。

というか、俺の上から落っこちた。

その時、その人の手から、妙な風が生まれて、周囲を巻き込んだ。

無論、俺とその人は吹き飛ばされた。

「うっうわああああ！！！」

「きゃああああああ！」

そして、吹き飛ばされた所に、先ほど投げた銃器があった。

「くそっ！くらええええええええええ！！！」

バアンツ！と、大きな音と火薬のにおいを放って、そいつは、銃弾を飛ばした。

その銃弾は、石の化け物に当たるが、バキンツ！という音がなり、弾かれてしまう。

「そんなんじゃ、ゴーレムは倒せないわ！ ‘イールグ’！」

俺の横で、彼女は起き上がり、銃弾が弾かれている様を見て、ゴーレムの方向に、左手を構えて…人差し指を向ける。

そして、何か を唱えて、風を生み、放つ。

それは、渦を巻いて、まるで、槍のように伸びて、一直線にゴーレムを貫く。

それが当たった瞬間、ゴーレムは粉々になった。

「すっ…すげえ…」

「ふう、大丈夫？ 君、名前は？」

その人は…いや、彼女は、そう問いかけてきた。

俺は…と言いかけたが、口を閉じた。

「ん？ どうしたの？」

え、あ、う…どうして…だ？

口から…出てきそうで、出てこない…。

自分が放ってきたはずの…あの発音が…あの言葉が…出てこない…！？

「な…名前…俺の…うっうあ…名前が、俺の名前が思い出せない！？」

どうして！？ さっきまで…いや…さっきの時点で忘れてたのかも…。そうであっても…これは…こんなの…うっぐ…。

「記憶喪失…そう、君…家に来ない？」

「え…？」

「フフ、どうして…？って顔してるね」

彼女は、笑みを溢して、そういう。

まっすぐに俺にそういう。

それにしても…とても…可愛らしい女性だった…。

顔は少し子供っぽくて、前髪をピンでとめて、顔の半分に髪がかかって、もう半分はその髪を払っている。

その払っている髪にはカエルの髪飾りがつけられ、髪の色は、黄色。服は、カッターシャツに、黒いスカート。長いソックスに、茶色の革靴。

そして、緑の瞳…。

俺は、彼女のその姿に惹かれた。

太陽の燦々とした草原に、二人。

俺と彼女がポツンといて、名前をなくして絶望する俺に彼女は手を伸ばして…

「私はノエル、ノエルⅡフォート…魔術師よ、宜しくね」

「ま…魔術師…？」

「そ、まあ詳しい話は家でしましょうか」

俺は、差し出された手を掴んで、身を起こして、彼女の家へと向かった。

無限に広がる草原は、揺ら揺らと…風に揺れていた。

第一話 魔術師（後書き）

登場人物追加

new ノエルⅡフォート

魔術師。主人公（名前なし）を助け、彼を家へと招く。

第二話 ロシル

「お嬢が戻られる…か」

「フフ、うれしそうね？」

「そうか？」

豪華なシャンデリアに、金の椅子…。

そして、ホワイトタイガーの皮膚で作られたシート…。

まるで、豪邸のようなそこは、分厚い本の本棚で囲まれていた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

「しかし、ここは一体どこなんだ・・・」

「ここは…そうねえ、強いて言うなら草原？」

「そんな事わかってるよ！」

一面に広がっている草原。

かつて、自分が記憶のある時に、ここにいたのか…？そんな疑問を自分にぶつけていた。

ノエルと名乗るこの魔術師はアテにできるのか…？

まあ、そんな類^{たぐい}を想像していた。

「…ところで、さっきの風…あれ、どうやったんだ？」

「え？ ああ… イールグ、ね」

彼女が、言葉と言葉の間に何かを発すると、風が手から目に見えるぐらいに激しく螺旋を描いた。

「それ、どうやるの？」

「これは、呪文スぺルよ」

「呪文？ なんだ、それ」

俺は、彼女にまもっている風をみつっ、彼女に質問をした。

回答としては、呪文は魔術師の根本にして、魔力源であり、それが魔術師の証明でもある。

とか、なんとか…俺には難しくてよくわからなかった。

「あ、ねえ君…私の弟子にならない？」

「で、弟子？ 俺が？ 魔術師の？」

「そう、別にいいでしょ？」

「…」

彼女の目は、キラキラと輝き、若干俺よりも背の低い彼女は、上目で俺を見る。

それに耐えきれず、俺は目をそらすが、すぐに彼女はそれを追った。

「とりあえず、これから君は、魔術師の弟子…見習い魔術師として

[illegible]

「ただいまあゝ！」

そこは、二階建ての家。

広い草原にちよこんとある家。

まるで、砂漠の中のオアシスかのようである。

「まったく…なんて所に家建ててんだ…」

「おかえりなさい、ノエル……あら、その子は？」

「帰ったか、ノエル！」

扉を開けるとそこには、グルグルメガネをかけ、オカッパ頭の女性とボサボサ頭のスーツの男がいた。

「紹介しよう、この子は……えと……うん、ロシル！」

「おい、ちよ…」

「よろしくロシルくん」

「…お嬢、こいつ…」

俺は、色々と混乱していた。

第三話 呪文

勝手に命名された名前…ロシル、ロシル…フォート…。
なんでも、英雄の名前らしい。
って、なんか俺勇者フラグ立ってないか？

「俺は、ソイル…ネードだ、んでこっちは本屋ノブ子」

「…とりあえず、ロシルでいい、ノエル…それで、魔術師ってのは…何するんだ？」

俺は、そこが疑問だった。
特に注目するべき点。

「お嬢、もしかして…」

「フフ、そうよ彼は見習い…。ロシル、あなたがその魔術師を疑問に思うのも無理はないわ…」

いや、無理ないってか、ほぼ無理やりだったわけだが…。

「とりあえず、あなたは今後からここにすること」

「なんでだ」

「魔術師は、危ないのよ」

「魔術師というのは、この世にあるという100の呪文^{スペル}を、全て得たものをいうの、まず第一に、魔術師は、誰にでもなれる」

「誰にでも？」

「ええ、私かなれないこともないわ」

と、本屋さんが言う。

グルグルメガネが目立つ。

「魔術師は、基礎である呪文を意のままに操る事ができるために、呪文を言葉にできないとダメなの」

「というത്？ さっきの奴か、ノエル」

「ええ、まあ：あれは手の平で作り上げた風を方向を示して突風にする呪文ね、あれは言葉として成り立たない」

「言葉として成り立たない…？」

「ええ、そうよ」

これから、少し話が長く続いたので、要約する。

魔術師は、呪文、というものを、自分に取り入れる事で、一つの呪文を扱うことができる。

そして、それらは、また100個あり、それらすべてを集めた者を魔術師とすることが、国家で決められている。

まあ、それはそれでいいとして、世界の構成についても、詳しく聞いた。

それについては、地図を見せられて説明された。
：知っているはずの島はない。

四つの島がその地図にはあった。

そして、それら四つの島の二番目ぐらいに大きな島をノエルは指をさして

これが、私たちのいる、フォーミル島よ

といった。

…なるほど、これが…。

F・M・islandと書かれたその島。

それから…魔術回路についても教えられた。

魔術回路とは、呪文を使う回数。

それがなくなると…死ぬ。

「なるほどなあ、大体わかった」

「あ、それとお水を頂戴、ノブ子」

「ええ、はいロシルくん」

と言って、ノエルは、玉座に座り、俺はそこら辺のイスに座り、手渡されたグラスを受け取る。

ノエルもまた同じようなグラスを渡される。

「ごくっごくっ…ぷはっ…フフ、それで…ロシル、魔術師の弟子になる気はある？」

「ごくっ…ふう、またその話か…もう、あれだけ話されたんだ、それは呑むよ」

互いに向き合い、そして俺はそれを了承した。

無論、断ってもよかった。

だが、もう空気の流れが、俺に同意を求めているのだ。

まあ、別によかった。

部屋を見渡す。

銃の整理をしているソイル。

ノエルから飲み干したから、もう一杯と言われ、はいはいと言ってそのグラスを受け取る本屋さん。

そして、天井につるされたシャンデリアが、キラキラとして綺麗だ。だが、明かりはそれだけしかなく、周りを見ると、端は少し薄暗い。でも、どうしてだろうか、この光から、少し…不穏な物を感じた。

「そう、じゃあ右手を出して」

「こう…か？」

俺は、頬に片手を置いてバランスを取る彼女に、右を差し出した。

「そうそう、じゃあ、やるね」

そういつて、彼女は、頬をついてた方とは別の手を俺の右手のすぐ上に出して、文字通りパーで、俺の手に重ねた。

すると、急に火でもついたかのように、俺は焼けるほどの痛みというよりも、刺激に近い物を感じた。

「あつっ」

「だめ、手を離したら、魔術回路が壊れちゃう」

「な、何をしている…んだ？」

俺は、熱さに耐えつつ、彼女の柔らかい肌の感触を味わう事もなく、そう尋ねた。

すると、彼女は、こう答えた。

「魔術回路を、開くの」

それが…こんな…。手のひらから感じていた熱が、やがて体に蔓延してきていた。

俺は、段々とその熱さに耐えつつあった。
どうやら、少し慣れてきたらしい。

「…おし、そろそろいいかな」

「もう、大丈夫…なのか？」

「ええ、手を離して…そして、こう唱えて、ノス、と」

…ノス、

第四話 ノス

‘ノス’…と唱えた。

いいや、口にすることもなく、ただ、口元で声を発しようとして、それが別の言葉になって…とか、そういう感覚だ。

声は出ている。でも、言葉としては成り立たず、人に聞こえない。いいや、聞こえていたとしても、‘ノス’は、ノスとしか聞こえていない。

けれど、発した言葉は、‘ノス’言葉であるノスと同音であるのに、違う。

「これで、契約終了…さあ、あなたもこれで、魔術師の卵の一人」

「ま、待てよ…魔術師は誰にでもなれるんじゃない」

「そうよ、誰にでもなれる。だけれど、力を持たなければ、押しつぶされちゃうもの…そうねえ…例えるのなら、アリを足で潰してしまふ事あるよね、あれのアリの気持ちね、痛いでしょう？ 苦しいでしょう？ それを補うというよりも、そもそもそこに何か風圧、壁、段差があれば、もしかすると、アリは生き延びることが出来るかも知れない。そういう理論で、安全対策として、魔術回路っていう魔術師の元素をいつでも出していられるようにしてあげる物、それが‘ノス’。でも、一回ぽっきりだけどね」

説明が長い…まあ、俺なりの解釈だが、おそらくノエルは、力負けて、死んじゃうぐらい呪文というのは、強い力を秘めているから、それを弱めてくれる魔術回路を、常に出す物として、‘ノス’という呪文があるから、それを発し、自らを守らせている…と言いたいのだろう。

少し、こんがらがってくる話ではあるが、まあ、そこらへんは、気にしたら、負けなのかもしれない。

「なあ、俺はこれからどうす「来たわ、ノエル…デーモンよ」

「へえ、結構お早い登場ねえ…あ、ロシル、ごはん炊いてて」

「ちょ、おまっ…何がどうなって…いや、待てって！俺、ごはんなんて、炊いたことないぞ！？」

「うっそお…！？「本当だ」」

彼女は、ものすごく驚いていた。

まあ、俺もだが…。

「ま、まあいいわ…ノブ子！ソイル！行きなさい！」

ノエルが、それを言い終えるのと同時に、風が窓から入ってきた。そして、銃声と爆発音が聞こえる。

…数秒後、扉が開かれ…。

「終わったわ、ノエル」

「お嬢、かたついたぞ」

「二人、取り逃してるわよ、‘ガクファ’」

と、ノエルが二人の後ろを睨んで、何かを唱えると、その向こうにいた兵士は、動きを止めて、草叢に、倒れた。…距離は、およそ50m。

その距離から、ほぼノーモーションで、一人が倒される様を見て、俺は少し震えた。

恐ろしく、そして…ここにいる者たちが、只者でないという事の確信を得たことの満足感。

それらが、混ざって、不安な震えと喜びの笑みが零れ、

「俺、魔術師になってみるよ」

と、三人に向かって、言った。

第五話 反逆と混迷 前篇

「んーで、お嬢」

「何」

「襲ってきた奴らの一人に、こんなもの持ってる奴がいた」

と言って、ソイルは折りたたまれた白い紙をノエルに手渡した。
それを開いてノエルは…それをビリビリに破り捨てた。

「ちょ、おま…」

「いいの、こんなの…」

「国王からの手紙だろ？またラブレターだったのか」

「まあ、そういう事にしといてちょうだい」

国王からラブレター…国…王…。

「…」

「どうした、ロシル」

「い、いや…ただ、国王からの手紙って、大切じゃないのか…って」

「ええ、まあ戦争に参加しろって言う奴だからね」

「だったら、行けよ…」

「なんでよ」

彼女に、権利はあるだろう…だが、

「国のためなら、身を捨てる、それが国民だろ？」

なんて、事を言った。

俺にとって、それはなぜか当然のように、口癖の類のように感じられるほど自然に発せられた言葉だった。

「国民？いいえ、私たちは、アッテベルカ反逆者よ」

「反逆者…？何言って…だったら、こんな手紙…」

「つまりは、死ねって言っているのよ、あの王様は」

俺は、その 死ね という言葉を聞いた途端、急に何か違和感のようなものを感じた。

…まるで、前に聞いた言葉で、トラウマだったように。

その時、急に地響きがした。

外だ。

大きな何かが、こちらに近づいてきている。

「悪魔…ノブ子、ソイル、ロシル、準備しなさい」

「言われなくても、準備完了よ」

「…いけるぞ」

俺は、何もかもが…急速に変化を始めたこの世界が、ぼやけ始めて、その場に倒れた。
まるで、意識が…奥底のどこかに引きづり込まれるようだった。

「ロシル!…シ…!!」

くそ…何も、聞こえやしねえ…や…。
そして、俺は目を瞑った。

「どういう事!ロシルが!」

「多分、悪魔に魂吸われてんだ」

「じゃあ、神姫^{シンキ}を呼ぶわ、ノブ子魔方陣の用意!私とソイルは、あいつ進行を阻止!」

「了解」

どうして、ロシルが…やっぱり、魔術回路の解放には、限界があったの!?

駄目よ…ダメよ、魔術回路を解放して死ぬなんて…!

魔術回路をつかえこなせないときに解放してしまうと、生気も一緒に抜けてしまう。

ただし、それは一時的な話。

だけれど、あいつがすぐに現れたから、それでその生気を一気に吸われて、気を失った…。

そう、考えよう。

いや、そうでなければ…自分を抑えきれない。
感情が爆発して、今にも悔しくて、自分を憎くて、
自虐してしまいそうだから。

今は、彼らを…信じ、ロシルを助けるのが先。
そう、自分に言い聞かせた。

「イーलग、」

と、唱えると、手から強風を小さくつくりだし、周囲の風おも吸い
込み始めた。

そして、圧縮…。

激しい音とともに、竜巻を作りだして、それを指先をまだ姿見えぬ
方向へと放つ。

「ノエル！2時の方向に、魔弾が来てる！」

「シェイケエル、」

シェイケエルは、周囲の魔弾を感知して、跳ね返す呪文。

ロシルを置いて、草原へ出たノエルは、ほぼ360℃悪魔に囲まれ
ていた。

「通りで、生気の吸収が早いわけね、ソイル狙撃銃で、何か見える
？」
スナイパーガン

ソイルは、家の屋根から、長さ1050m程度の全長がある。

それを、軽々しく片手で構えて、スコープを覗きそして、相手を確
認する。

「ノエルが、打ったイーलगの方向にいる」

「距離は…ああね、まあまあじゃないかしら」

そういつて、ノエルは弓を構えるように右手の人差し指と中指を丸め、

親指でそれを抑え、そして引いていく。

すると、そこから電撃の糸のような物が、蛇のように絡み付いて、そしてビリビリという音を激しくたてて、それは動く。

そして、左手には、黄金の弓が握られ、イーलगが目指した先へ構え、放った。

「カルティスオウネ」

というと、放った矢は、電光石火の如く、光の速さで直進した。

第六話 反逆と混迷 後編

「復讐？まあ、それも悪くはないけれど…もう少し、数を減らせてくれないかしら？あんまり疲れたくないの」

そういい、私は、指を天へと掲げる。

そして、‘ティツチェ’と唱えた。

すると、指先から、閃光が広範囲を包み、そして影の悪魔を消し去った。

周囲は、チリ一つ残らず、まるで何もないかのようになった。

だが、その中で幾つかの影がノエルを襲う。

「フフ、B級悪魔には、ティツチェは効かないっけ？じゃあ、‘イールグ’」

目の前に、突如として現れた影に、突風が襲う。

彼らは、影をグニャグニャにされて、吹き飛んだ。

形は、崩れてそして跡形もなく、消えた。

そして、最後に強敵と思われる奴が姿を現した。

「へえ、ゲーデか」

「異界の地の者を引き取りに来た」

「残念だけど、ここには異界人はいないわよ？」

黒い山高帽と燕尾服を着た男の姿がそこにはあった。

私から見ると、長身で、大よそ180cm程度はあろうか、それぐらいはあった。

彼は、ゲーデ

生と死の間の仲介者なんていわれてる。

そんな彼との面識というと、魔力を大幅に出した時に自分が力尽きそうになり、そこへゲーデが来て、魔力供給をする代わりに、死者を送れと言われている。

無論、ここには今死者はいないから、どうにもならないわけだが。

「そうか、ではまた伺うとしよう、してノエルよ」

「なに？」

「私は、こう：ファッションというものはわからないのだが、その姿は、少しどうかと思うぞ」

「なんのことかーしーらー？」

ちょっと頬を膨らまして、怒る私を見て、ゲーデは言葉を選ぶと少し焦っている。
フフ、かわいい。

「…ごほん。まあ、私はこれで失礼する。ノエル、手をこちらへ」

「魔力供給ね、わかったわ」

私は、両手をパーにして、目を少し閉じる。

ゲーデは、その上に手を置く。

黒い手袋から熱気が伝わり、私の手を段々とあつくする。

「終わった、ノエル：いいか、あまり無理をするなよ」

「あなたに言われちゃうの？ あらら、恥ずかしいわ」

まあ、彼にはわかられちゃうんだろう・・・。

私が、彼と魔術回路でつながっているのだから。

魔術回路は、魔術師の魔力の通路。

それが繋がれるということは、魔力を共有すること。

私とゲーデは、魔力が送受信できる。

魔力連結という。

ただし、できる人数は3人までと決まっている。

魔術回路は、共有者の命にもかかわる…。

一人が死んだら、ほかも死滅する。

それが、魔力連結の怖い所だ。

魔術師の根本である呪文の受け渡しも、魔力連結で、できる。

私の師匠、エドワードⅡフォートと私は、魔力連結で、魔術師権限の受け渡しをした。

100の呪文と1の呪文。

それが、魔術師という者が持つものだ。

私は、1の呪文、「加護」がある。

1の呪文は、魔術師に問わず、持っている呪文。

そして、100の呪文は、魔術師の証明として、最後に自分が作る呪文。

100の呪文は、魔術師権限の受け渡しをした時、魔術師になる方の1の呪文となる。

「私、ノエルⅡフォートは、ここに血の契約を…」

「私、ゲーデ・アンデリフェン・デ・ビューカディオスは、ここに冠の契約を果たす」

「すなわち、私はゲーデ・アデュエブリフェツ…いいにくっ！」

「なっ、失礼な！君の名前と同じではないかっ！」

「もう…ゲーデでいいでしょ…？」

「却下だ。」

そんな時、ソイルとノブ子が近づいてきた。

ゲーデは、早くしろと言って、契約を急かせ、その契約は成立した。私は、このゲーデのフルネームをいつになっても覚えられない気がする…。

とりあえず、フォーミルに会う…必要がありそうね。

「フッ、あれが、新人魔術師君候補…」

「さて、どんな味がするんだろおなあ！」

「これ、急かしてはいけないぞ、シフォン」

「お前もよだれふけよお、エイピロ」

二人の男が、ノエルの家に住む、ロシルを見て、いや狙っていた。

第七話 魔導師

「さて、そろそろ動くぞ…」

この島の城の王、ラグナ・フォーミルは、二人の使者を用意した。彼らは、魔導の道を進む者、魔導師。

そのエキスパートだ。彼らは、それぞれに持つ武器を自由自在に扱う。

オールバックの黒と白の縞々の髪型に、緑のフードコートを身にまとい、大鎌を片手で軽々と持つ男の名は、シフォン・ノイスクランチ。

黒いスーツ姿に、白髪 of 男の名は、エイピロ・ヤングマン。

彼らの使命は、ロシル・フォートの監視。

そして：エイピロはその使命を得たとき、ニヤリと白い歯をむき出しにし、ほほ笑んだ。

まるで、待ち浴びたかのように…。

ラグナは、それを見て、確かにほほ笑んだ。…が、一人シフォンだけは、それをしなかった。

「…ほう、貴君があ of 魔導師に。ですか、ふうむ、またもや面白い方に…フッフ」

「るっせえ！行くぞ、ノエル！」

「え、ええ！シフォン！」

シフォンは、しばし、空を眺めここに至ったまでの経路の内、ノエルとの共闘を思い出していた。

城壁に囲まれた城、フォーミル城…。

そして、それをさらに囲む城下町…。

それらを見下すようにシフォンは目を細めて、こう言った。

「覚えてるか…ノエル…ここが、お前と俺の理想郷だったんだぜ…
こんな…薄汚れた大地が…!!…ああ、くそ、チクショウ!くそ、
くそ、くそ!俺たちは、何のために…ノエル…くそ…」

「な、なんだ?」

俺は、窓辺を見る。

妙に微動する窓。

そして…その先に…人の影。

「まさか、敵!?!」

俺は、腰のベルトにつけていたハンドガンを手にする。

投げ捨てた後、ノエルが拾ってくれたのだ。

…そして、このハンドガンには、魔弾^{まがん}という魔力を使った弾が入っているらしい。

それは、持ち主の魔力を弾に変換することで、弾丸を供給する仕組み。

『我が洗礼を受けよ、ラ・ビネスチエ』

と、俺がそれに気が付いたのは、吹き飛ばされた後だった。

壁を鉄球が通ったようにぽっかりと開け、そいつらは現れた。

「魔導師、とくじょ…なんてな?」

大鎌を持ったオールバックの男と、黒いスーツ姿の男が、こちらを見下してそういった。

かという俺は、吹き飛ばされて、家の壁で吐血してばやける視界からそいつらを見た。

…確実に、やり手だ…。

「エイピロ、こいつは任せる、俺はやることがあるからなあ…」

「わかった、十分に楽しんで来い、シフォン」

そういつて、シフォンと呼ばれるオールバックの男が、開けた穴からさつきノエルたちが向かったところへと歩んでいった。

「ぐふっ・・・お前ら…一体…」

「フッフ、なるほど…君は知らな、なんだ…だけれども、君は知る必要はない、大人しく呪文を渡せ、それが君が生き残る唯一の手段だよ、ロシル・フォート君」

俺が…持つ…呪文…なんて、…ないぞ…。

「さあ、早く。ああ、そういうえば手渡しはできないシステムだった…では、強制的に抜くでしょう…」

そういつて、物凄い早さでこちらへと飛び込んでくる。

咄嗟に俺はそれを横へと転がって避ける。

…壁からは、ボロボロと壁に使われていたコンクリートが零れ落ち、かつそこには平然と壁に腕を突き刺すエイピロの姿があった。

避けなければ、…ああなってたわけだ。

「ちょこまかと…動くな」

「あ、生憎^{あいにく}…俺はそんな趣味はないんでな…」

ノエルたちが戻ってくるまで…待つ…か。

いや、待てよ…さっきのシフォンってやつがあいつらの足止めをしてる可能性も…

「つて、うわっ！」

俺は、またもや襲い掛かるエイピロの猛進からスレスレで避ける。

やはり、早い。

…けれど、見切れる…。

「このスピードについてくるとは…いいだろう、ではこうだ」

次に、エイピロは手と手を合わせて、ゆっくりと左右に伸ばしていく。

すると、そこから電撃が生まれ…。

「形勝とは、このことだろうか、私は君から残り数歩でたどり着き、かつ君は壁に追い込まれている、これはもはや…死を覚悟する所だろう」

電撃の中から、弓が生み出されてゆく。

それも、広げた分だけ。

「私は、このラ・ビネスチェを扱うアーチャーの魔術師…これぐらい明かせばわかるだろう？」

「…なるほどな、つまり俺はここから動くとその弓でやられ、動かなければ…貫かれるわけだ」

たとえ一撃をかわしても、次の攻撃では身動きは取れない。
つまり、連撃が来てしまうとやられるという事だ。

「そういうことだ。諦めろ」

「殺してまで奪えるものなのか？これ…まあいいや…俺も俺でこいつを使ってやる」

そういつて、ハンドガンを強く握る。

「ふむ、投影武装とちがって、実物武装の方が有利…なぜなら、反魔力効果があつて、魔力を相殺してしまうから…だが、有限ゆえにそれは投影に劣る！」

弓を構えるエイピロ。

俺は、それに対してハンドガンを構える。

…そして、銃弾は銃口から跳ね、そして…。

第八話 シフォン

「お嬢、新たな敵を確認したおそらく…魔導師だ」

「魔導師…ですって…？」

「数年前にケリはついたんでしょ？あの戦いで」

そう、私は…もう、魔導師じゃない。

魔導師に追われることはない。そう思っていた。

シフォン・ノイスクランチ。

彼とは、私がまだ魔導師として、国のために働いていたときに知り合って、その時に三導師と呼ばれた内の一人が私だ。

魔導師とは、自らの魔力を使って生み出した武器を使って戦う者の事で、これは才が求められる。

そして、私にはその才能があった。

ライトドラゴン
光龍という龍が、私の武器。

魔導師の武器は、生物であっても当てはまるが、それはかなりの実力者にのみだそうで、私は、それを平然とやってのけたわけだ。

魔導師として、私は生きて、そして…あの日がやってきた。

そう、それは…豪華客船、スカイウェーブ号での話。

魔導師の仕事は、国の密告者や犯罪者などを殺すこと。

重罪に当てはまるものが、これに該当する…。

そして、スカイウェーブ号に、ジャックを仕掛けたとされるメリュジーヌを確保または殺害することが、目標で、乗り込んだ私たちは、メリュジーヌの罠にはまり、スカイウェーブ号の乗客を生け捕りにされ、さらに私はメリュジーヌによって、魔力を失ってしまい、光龍を出せなくなった。

…だから、やめたのだ。

魔術師は、呪文を使うとき、魔力を使うが、呪文がその分負担してくれるために、私は少量の魔力を放てば、どうにかなる。そのため、私は魔術師となったのだ。

：最終的には、私の師を殺す事になったわけだが…。

「私に何か用かしら？ シフォン」

「ああ…国王、ラグナ・フォーミル王からの伝言だ、急ぎロシルを渡せ。」

「！？ ということ！？ ロシルが何をしたというの！？」

魔導師は、密告者や犯罪者を裁くだけ…。

私は、魔導師の時に、それをしてきた。

その方針が変わったのかはわからない。けれど…。

「あのロシルという少年…もしかすると、スパイかもしれない。それが理由だ」

「…そんな事、わかるわけ…」

「いいや、それをこれから確かめる、それだけだ…」

私は、フードコートを風になびかせて現れた男、シフォン・ノイス
クランチの横を通ろうとする。

：すると、彼は両手を合わせて、そこから電撃を作り出して、そこから長い棒を生み出して、そしてそれを片手でつかんで、ブンツと回転して振るう。

それを、上半身を曲げて、手を地面につけて、かわす。

そして、そのまま重心を手において、私は後転して立ち上がり

「シフォン…どういふつもり…？」

と言った。

その時、シフォンは嫌悪の目で私を睨んでいた。

そして、大鎌の刃を私の喉元に向ける。

「悪いが、俺はお前にも用事があるんだよなあ…ノエル、いや…反逆者」

シフォンは、向けた刃を少し離して、勢いをつけて、私の喉元を狙いつけ、振るう。

…と、そこで、パキンツという音を鳴らして、刃は弾かれた。

「お嬢に手え出すとはな、仮にも同僚だったろ？」

「ふん、同僚は昔だ、それに魔導師の規則に則ってこうしているんだ。他者は首を突っ込むな」

シフォン…どうして…。

「ノエル、ロシルくんが心配だわここはソイルに任せましょう」

「…ソイル…」

「行け、ロシルを失ったら、お前の先を誰が継ぐんだよ」

「!？」

知ってたんだ…。

魔力連結の事…バレてた。

隠してたつもりなのになあ…やっぱ、真実を見抜く目には…わかったっちゃうのか。

彼は、呪文こそないものの、1の呪文 「真目」^{しんがん}を持っている。

真目は、どの距離に何があるのか、そして嘘を見破るとか、もうその類の目に見えるすべてを知ることができる目。

鷹の目とも言われたりする。

ソイルは、武装を開放する。

彼は、服の内側にあった銃器を取り出して、戦いを始めた。

…どうしてなの…？ シフォン…。

俺は、エイピロに向けて、引き金をひいた。

しかし、エイピロの矢が放たれる方が早く、目視でこちらに矢が飛んでくるのがわかって、すぐにひいた引き金の方の力が抜けた。

すると、銃口から気の抜けた弾がぼろっと落ちた。

それを確認するよりも先に、俺は顔に向かってくる矢を体を捻ってかわした。

何故か…スローで見えた。

一本一本の矢が、俺には見える。

「その矢…遅いな」

「それはどうかな…一本一本は遅い…だが、お前は前を見すぎだな」

「なに!？」

と言って、俺は後ろを向く。

…だが、そこには突き刺さった矢のみ。

「かかったなっ！これで終わりだ！」

「くそっ！」

俺は、あわてて、銃口を向けて、引き金を…ひいた。
今度は、力を込めて。

…すると、銃口から光が漏れ始め…そして

「うおおおっおおおおお！！！」

放った。

銃弾が発射された…のではなく、光のレーザーのようなものが、そこから放たれた。

エイピロの矢は木端微塵に。

そして、レーザーはそのままの勢いでエイピロを包む。

「なんだとおおおおおおおおお！！！」

そして、レーザーは直進を止めずに、そのまま地響きをあげて、開けられた穴の大きさと同じぐらいの大きさのまま、草原を走った。

「な、なんだ！？これ！」

俺は、あまりの勢いでハンドガンを今にも離してしまいそうになる。
だが、このまま落とすわけにはいかない。

もしも天井を貫いてしまったら、ここがつぶれてしまったら…。

俺は、下敷きになるからだ。

「でも、どうやって止めるんだ、これええええええええええ！」

俺は、ただ嘆いた。

「ロシル！引き金を離して！」

「ノエル！？あ、ああわかった！」

そういわれるがままに俺は引き金から指を離した。
すると、今までの衝撃が嘘のように、スッと反動が消えた。

「ふ、ふう・・・すげえ・・・な、これ・・・」

「それが、君の魔力・・・？へえ、やっぱり才能あるね、ロシルくん」

「さい・・・のう・・・？」

「ええ、ノエルが気に入るわけだ」

「は、はは・・・うっ・・・」

そこで、俺は・・・気が付いた。

自分の胸元に・・・矢が刺さっていることに・・・。

「ククク、ついに・・・呪文を手に入れた・・・ぞ・・・感謝する、ロシル・・・ぐあ・・・はっ・・・むんっ！」

服がボロボロで、重傷を負っているはずのエイピロの最期の一撃だった。

そして、エイピロは何かを使って、そこから一瞬で消えた。

「…とりあえず、ロシル…話したいことがあるの」

「…わかった」

これが・・・俺の魔術師への一歩だった。

裏第一話 エドワード（前書き）

この物語は、ノエルが魔術師になる前の物語…。
ノエルの師、エドワードの物語です。

裏第一話 エドワード

俺たちには、俺たちしかいなかった。

世界という言葉は、俺たちの事とばかり思っていた。

他者と触れ合うなんてことはなく、またそれに担う事もない。そういう考えがあった。

俺、エドワード・フォートはそう思う。

「ああ…まだ降るのか、まったく…飽きやしないな…雨って野郎は」

「ふ、まあ、よいではないか、エドよ」

「そーそー、僕たちにとって、雨は母だぜ？母なる聖地、ここ【アルフェグラ】に生まれた聖子」

「それを、ただ汚すという事は許されるまい、リーダー」

「…そうだな、アルフェグラは、俺たちの聖地だ」

俺たちは、ここをアルフェグラ…大いなる楽園と呼んだ。

俺たちしか住んでおらず、廃墟ビルや腐った肉。

その他人工的に作られた施設なんかも崩壊している。

昔、大空襲によって、ここは崩壊した。

その際、俺には家族というものがあつたが、皆空襲であの世に逝った。

俺は、自宅にいて、そこで空襲を受けたが、奇跡的に生き延びた。

母が、俺を土に埋めたからだ。

大きめの五右衛門風呂のようなものを、土を掘って入れて、そしてそれの中に俺を閉じ込めた。

しばらくして、母は紐をその中に入れた。

自力で抜け出すためのものだ。

母は、最期に何か言い残し、そして土に埋めた俺を置いて去った。

俺はその時、母の事が好きだった。

母は、俺の一番の理解者で、俺にとって、唯一の肉親。

父は早く亡くなった。

兄弟は、おらず、俺一人がそこにいた。

そして、俺は紐を引っ張る。

母に会うために。

そう、俺はこの時、母に捨てられたと思っていたんだ。

だから、待って、行かないで。と、そう言いたかった。

けれど…。

母は、去ったあと、俺の食事として、飴袋を持ってきた。

飴袋の名前は、アルフェグラ。

キャラメルとかイチゴとか、とにかくバリエーション豊富な飴がたくさんあって、子供に大人気だった。

俺が土から出てきたのは、母が俺に飴袋を置こうとしたときで…。

その時、空襲が俺たちの家を襲った。

無論、家は全壊。

俺は、激しい音を聞いて、慌てて外に出ようと紐をひっぱった。

すると、土に被っていただろう蓋が、どんと土を押しの上へ上へと上がる。

どうやら、井戸か何かにひっかけていたようだ。

空襲が来ても、なぜかこの紐が千切れなかったことは奇跡に近い出来事だった。

「お母さん…お母さん！」

俺は叫んで、そして…ようやく土を押しのかげ終えたところで、かぶっていた土が五右衛門風呂へと侵入してくる。

「ぶっぐ・・・つ、土が目に…痛い…痛いよ…」

目に土が入って、出口のわからない俺は、とにかく上を目指した。
そして、俺は何かに捕まった。

…生暖かい感触。

どこことなく、安心できる手触り。

人の肌の柔らかさだ。

「お母さん！そこにいるんだね！えへへ、僕やつと…」

腕を…握った、握って…それで…母と思われるそれが、妙に軽い物
と思った。

最初は何も感じなかった。

母の顔を見る事が今幸せで、母の笑顔が…。

俺は、土から顔を出して、ようやく外に出た。

目を服で簡単に土を落とした手で何回かこすり、目の土を取る。

そして、俺は出てきた五右衛門風呂の埋められた所を見ると…そこ
には、

…人の腕が、無造作にあって、関節から肩までがもうなかった。

けれど…その腕の…先、手のひらには…。

俺の大好きな、アルフェグラがあった。

母がよく買ってきてくれたアルフェグラ。

いつも横で母とニコニコしながら…口にして、幸せを感じていた…
飴袋。

そして、無残に家を破壊され、原型すらなく、柱一つ一つがもう崩
れきっていたそれに、人らしきものがあった。

「え…、あ…あ…あああああああああああああうわあああ

あああああああああああああああ！！！！！！」

思わず叫んだ。

訳が分からない。

俺が、何を、母が何を…。

崩れた柱に、突き刺さった人の体。

それは、女体。

そして…それは、俺のよく知る人物。

「おかあ…さ…おかさあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああん！」

母は、もう、死んでいた。

それから、俺は…施設へと送られた。

母の形見。そう考えていつも片手にアルフェグラを握っていた。

施設では、俺よりも傷ついた子供が何人もいた。

けれど、数えられる程度。

ざっと30人ぐらい。

当時、俺は7歳で、母という存在の大きさを大いに感じて、俺は友達というものをつくったことがなかった。

だから、他者との慰めを見ても、なんとも思わない。

ただ、唯一を失われた絶望感が、俺を不快にさせるだけだった。

こんな所、早く出ていきたい。

そう、俺は思った。

………

………

…

「リーダー、そろそろ…始めるぞ」

「…ああ、アルフェグラ計画、スタートだ」

俺たちは、ここ、アルフェグラの領地拡大をするために、他国へ戦争を仕掛けるのだ。

それが、アルフェグラ計画。

俺たちの…国造りだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2137w/>

見習い魔術師の100の呪文

2011年11月3日12時20分発行